

自主防災組織



防災訓練 ガイドブック



酒田市危機管理課

1 防災訓練ガイドブック作成の主旨

災害が発生した場合、「自分の身は自分で守ること(自助)」が基本ですが、顔見知りである隣近所の人々が、互いに協力しながら災害に対処して、被害の軽減を図ること(共助)は極めて重要です。

自主防災組織等では、日頃から防災訓練を行っていると思いますが、訓練を効果的に行うにはどうすればいいかなど、計画を作成して実施するにあたり悩みも多いと思われます。計画担当者のこうした悩みを解決し、手助けとなるよう作成したのが本ガイドブックです。

2 防災訓練の重要性

人は日頃やっていないことは、いざという時にはできません。防災訓練において避難行動や救出救護活動などを繰り返して行うことにより、体に覚え込ませることが重要です。こうすることによって、災害時に体が自然と反応して落ち着いて行動することができるようになります。

3 事前に準備(実施)しておくべき事項

(1) 地域を知る

自分たちの暮らしている地域を知っておくことは、防災上大切です。防災の視点で地域を見回り、倒壊危険家屋、看板等の落下危険箇所やコンビニエンスストア、公衆電話など災害発生時に役立つ施設がどこにあるかを把握します。また、地域の避難場所や避難所、避難経路も確認しておきます。

(2) 災害を知る

酒田市は、過去に明治の酒田大地震や昭和の新潟地震などで被害を受けています。大規模な洪水は昭和19年の最上川の破堤以降ありませんが、最近では異常な豪雨があり、風害も多く発生しています。災害の種類や傾向、災害発生メカニズムなど、災害そのものを知ることも大切です。

(3) 人を知る

地域にどのような人がどのような時間帯におり、どの程度の活動が可能か知っておくことは重要です。また、お年寄りや身体の不自由な方など災害時に支援が必要な人や支援ができる人も把握しておきます。

(4) 知識・技術を習得

防災訓練や講習会等がある場合は積極的に参加し、一人ひとりが防災について正しい知識や技能を身につけるようにしておきます。

4 効果的な訓練にするためのポイント

ややもすると訓練は形式的になりがちですが、災害時に本当に役立つ実践的で効果的な訓練を実施することが大切です。

◆ 防災訓練計画を作成し、実施するうえでのポイント

- ① 訓練目的の確立
何を目的(狙い)とする訓練なのかを明確にします。
- ② 訓練日の決定
 - ・地域の行事と重ならない日に行うのか、合わせて行うのか決めます。
 - ・訓練が中止になった場合の予備日も決めておきます。
 - ・毎年定期的に行うのであれば、〇月の第〇曜日と決めておきます。
- ③ 訓練会場の確保
 - ・訓練内容に応じて適切な場所を選定し、確保します。
 - ・学校の校庭を使用する場合などは、施設の管理者の了解を得ます。
- ④ 関係機関との調整
消防署などに訓練の指導や講評を依頼する場合、他の団体と合同で実施する場合は、よく調整します。
- ⑤ 訓練資機材の確保
使用する訓練資機材をリストアップし、借用しなければならない資機材については、早めに調整して確保します。
(例)水消火器・AEDなどは消防署、起震車・アルファ化米などは市危機管理課
- ⑥ 参加者の見積り
訓練に参加する範囲を決め、参加人数を適切に見積ります。
- ⑦ 訓練担当者の役割分担
訓練をスムーズに行うために、訓練担当者の役割を明確にしておきます。
- ⑧ 訓練中止時の対応
 - ・訓練を中止とする条件及び実施の可否をいつ判断するかを明確にしておきます。
 - ・訓練を中止する場合の連絡方法を明らかにしておくとともに、予備日に実施する場合は、その旨を伝達します。
- ⑨ 住民への広報
 - ・ポスターを作成し、掲示板に掲示します。
 - ・ポスター、訓練計画書を回覧します。
- ⑩ 訓練会場の準備
訓練会場を前日までに整地するとともに、使用する資機材を搬入しておきます。

- ⑪ 訓練の実施
 - ・ 訓練責任者は、訓練全体の進行状況などをしっかり確認します。
 - ・ 進行管理者は、進行時間の記録及び写真撮影をして、次の訓練の参考にします。
 - ・ 安全管理者は、訓練全般にわたって訓練事故防止に努めます。
- ⑫ 訓練の講評など
 - ・ 消防署などから指導を受けている場合は、訓練の講評をしていただきます。
 - ・ 検討会などにおいて、必ず訓練内容を総括し、問題点などを明らかにしておきます。

◆ 訓練参加率の向上のポイント

- ① 訓練実施の周知徹底
住民の皆さんに訓練の日時や場所などをしっかり広報して、訓練の実施を「知らなかった」人がいないように徹底します。
- ② 訓練日時に変化をつける
いつも同じ日時に実施していると、同じ人しか参加できないので、休日だけではなく、夕方や夜間など多くの人が参加できるように変化をつけます。
- ③ 訓練内容に変化をつける
防災訓練は、自主防災組織の活動を地域住民に理解してもらう大切な機会です。しかし、毎回同じような訓練内容では、参加している人もマンネリ化してしまい、結果的に参加者が減少することにもなります。堅苦しいだけの防災訓練ではなく、イベント的な事柄を取り入れるなど、少しでも参加しやすくなる工夫をします。

【具体例】

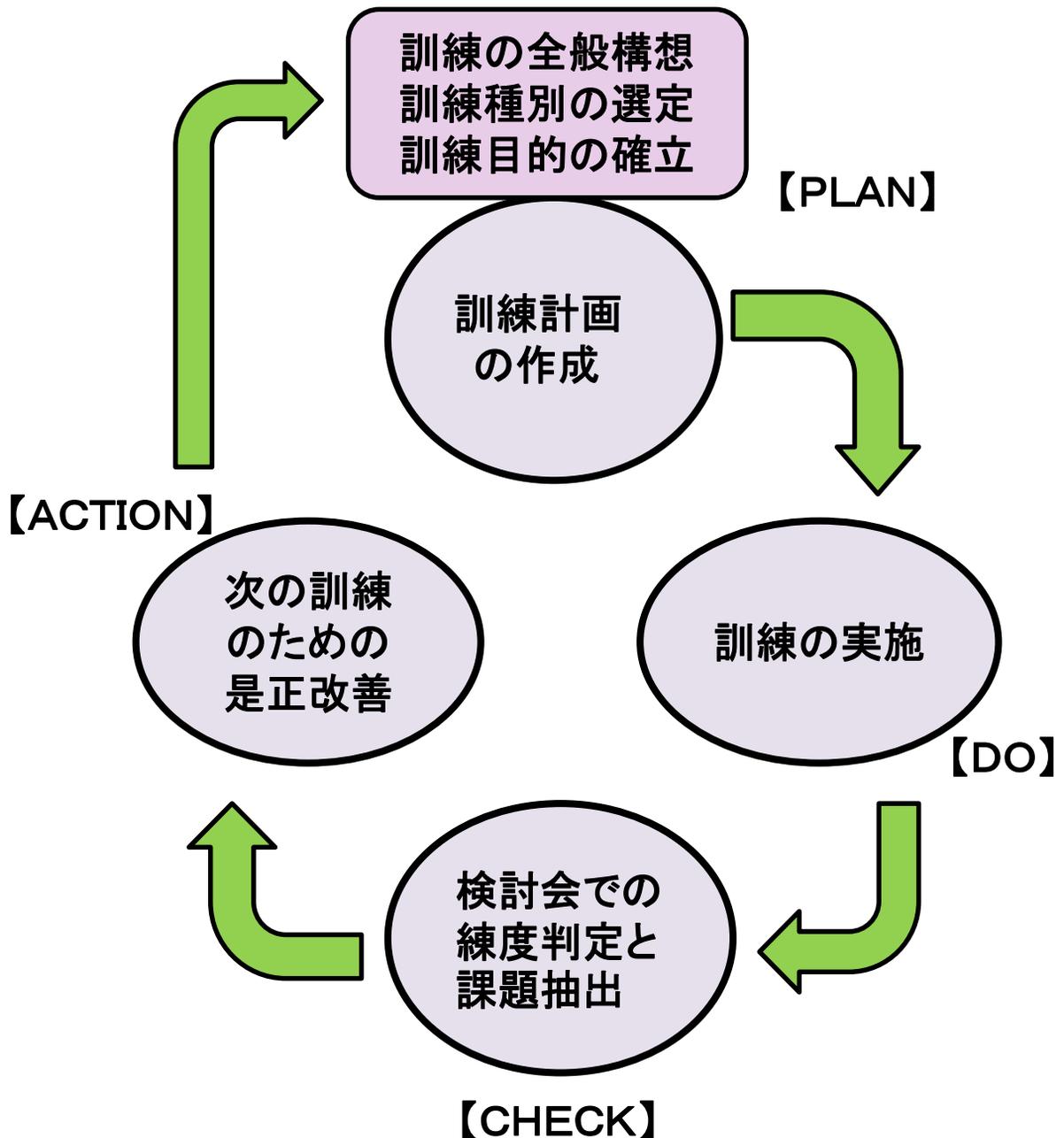
- ・ 地域のイベント(運動会、納涼祭など)に合わせて行う
- ・ 1泊2日のテント生活体験
- ・ 起震車体験
- ・ 災害を想定したゲーム(担架競争など)



◆ 防災機関の活用

- ① 消防機関からは、消火訓練、救出訓練及び応急救護訓練などで指導を受けるとともに、訓練終了後に専門的立場から講評をいただき、次の訓練の参考とします。
- ② 訓練内容等については、必要に応じて市危機管理課に予め相談したり、訓練への立ち会いを依頼します。

5 訓練の一連の流れ【PDCAサイクル】

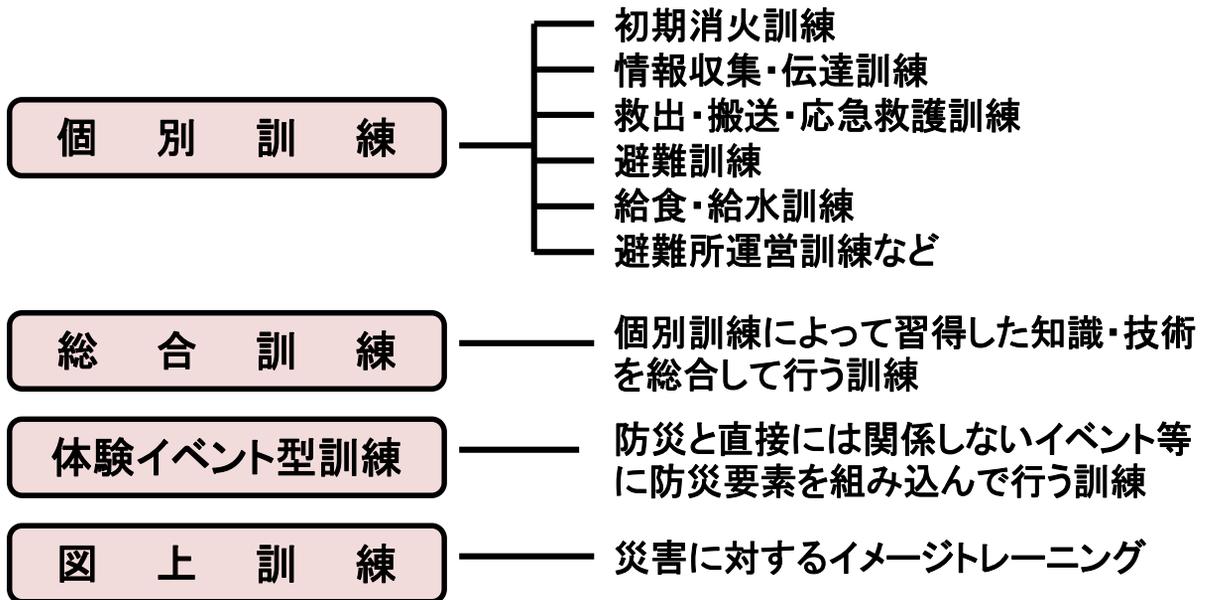


何のための訓練なのか目的を確立したうえで、達成すべき目標を明確にして訓練計画を作成します。訓練中は事故防止に努め、訓練終了後は訓練内容を総括して見直し・改善を行い、次の訓練に反映させることが重要です。

また、訓練は個別訓練から行い、反復して訓練しつつ習熟度に応じて訓練を組み合わせて行うなど、段階的に実施することが大切です。

なお、地域内の事業所等の自衛消防組織、近隣の自主防災組織と合同訓練を行い、バリエーションを広げるのも良いでしょう。

6 防災訓練の種類



上図が訓練の分類ですが、訓練を細分化すればいろいろな訓練があります。例えば初期消火訓練であれば、バケツリレーによる訓練、粉末(水)消火器を使用した訓練、可動式小型自動ポンプを使用した訓練などがあります。

また、自主防災組織単独での訓練、地域住民も参加する訓練、他の団体と合同で行う訓練に区分することができます。

なお、地域の特性に応じた訓練を行うのも大切であり、以下のような訓練が考えられます。

地域の特性	訓練内容
海岸に隣接した地域	津波を想定した訓練
河川に隣接した地域	洪水を想定した訓練
急傾斜地に隣接した地域	山・崖崩れを想定した訓練
住宅が密集した地域	延焼火災を想定した訓練
観光施設がある地域	観光施設利用者を加えた訓練
社会福祉施設がある地域	社会福祉施設入所者を加えた訓練
事業所がある地域	住民と事業所の合同訓練
大きな病院がある地域	住民と病院との合同訓練

■ 初期消火訓練

大規模地震では、建物の倒壊以上に怖いのは火災の発生です。火災が発生した場合には、すぐに消火できるように初期消火方法を習得しておくことが大切です。

主な訓練としては、「バケツリレーによる訓練」、「粉末(水)消火器による訓練」、「可搬式小型動力ポンプによる訓練」があります。

● バケツリレーによる訓練

1列リレー、2列リレー、千鳥リレーがありますが、2列リレーのやり方は以下のとおりです。

1 訓練手順

- (1) チームを10名～20名程度で編成し、水槽に水を入れておきます。
- (2) 水槽から標的に向かって送水側と返送側の2列に向き合って並びますが、返送側の人員は空のバケツなので送水側より少なくします。
- (3) 送水側は概ね1m間隔で並び水槽に溜めた水をバケツに半分程度汲み取り、右手でバケツを順番に中継します。
- (4) 最後尾の人が「火元の標的」をめがけてバケツの水を投げかけます。
- (5) 返送側は、空のバケツを同様に右手で中継します。
- (6) 標的が倒れるまで中継を繰り返します。



右手で中継します

2 留意事項

- (1) 水槽に水を入れる時は、バケツの底に手を添えます。
- (2) バケツの水は、満水にすると重さやこぼれる事に気を取られて効率が悪くなるので、半分くらいにします。
- (3) 水の重さがあるため、両足を前後に開いて身体を安定させてから水をかけます。
- (4) 実際に火を燃やして訓練する場合は、火の勢いが強い時は3～4m離れた位置から水をかけ、火勢が衰えてきたら近づいて消火します。
- (5) 天ぷら鍋火災のような油火災には絶対に行わないようにします。



3 使用資機材

火元となる標的、水槽、バケツなど

● 粉末消火器を使用した訓練

1 訓練手順

- (1) 消防署員などから、消火器の使用方法や使用上の注意点などの説明を受けます。
また、実際に消火の展示をしてもらいます。
- (2) 消防署員などは、準備しておいた燃焼物(オイルパン、灯油等)に点火棒を用いて風上から点火します。
- (3) 参加者は、
 - ①消火器の安全ピンを抜き、
 - ②ホースをはずしノズルを火元に向け、
 - ③レバーを強く握って消火剤を燃焼物に噴射します。

《 粉末消火器の使い方 》



2 留意事項

- (1) 風下の住家等と距離を十分にとり、見学者はオイルパンから最低10m離れます。
- (2) 途中で安全ピンを抜くと消火する前に薬剤が放射したりして、役に立たない場合があります。
- (3) 炎の大きさに惑わされず、燃えている物をしっかりと確認します。
- (4) できるだけ姿勢を低くして、熱や煙から身を守るように低く構えて行います。
- (5) 粉末消火器は、いったん火が消えても再び燃え上がることがあり、その場合はバケツなどで水をかけて完全に消火します。
- (6) 訓練後の廃油の処理を適切に行います。

※ 水消火器を使用した訓練

水消火器は、訓練用として使用する
ために作られた消火器で、何度でも
水を入れて使用できます。

(訓練の流れや操作要領は粉末消火器
と同じで、留意事項もほぼ同じです。)



3 使用資機材

油ピット、点火棒、バケツ、チャッカマン
ガソリン、灯油、粉末消火器
水消火器、火点(目標)など

● 可動式小型自動ポンプを使用した訓練

1 実施要領

- (1) 5名で1組を編成します。
- (2) 動力ポンプを固定します。
- (3) 吸管を動力ポンプに取り付けます。
- (4) 吸管を防火水槽やプールなどに入れます。
- (5) 動力ポンプの継ぎ手へホースを取り付けます。1本のホースで足りない場合は、もう1本のホースを継ぎ足します。
- (6) 消火員2名は、ホースをしっかりと保持して、筒先を火元に向け放水します。

2 留意事項

消防署員や消防団員から指導を受けて行います。

3 使用資機材

可搬式小型動力ポンプなど



■ 情報収集・伝達訓練

災害が発生した場合は、通信手段の途絶や混乱が生じるため、思うように必要な情報を得ることが困難になります。不確かな情報やデマによって勝手な行動をとるとパニック状態を引き起こすことにもなります。

このため、住民が混乱しないよう、いち早く周囲の状況を把握し、正確な情報を住民に伝えることが大切です。

● 防災関係情報の収集訓練

1 実施要領

- (1) 自主防災組織で災害対策本部を設置します。
- (2) 市災害対策本部などの防災関係機関からの情報や指示事項を、防災行政無線、広報車、テレビ、ラジオなどの報道機関から情報収集します。
- (3) 情報班は、収集した情報をつとまとめ、自主防災本部で模造紙やホワイトボードなどに書いて情報を共有します。



● 地域の避難・被害状況等の情報収集訓練

1 実施要領

- (1) 自主防災本部において、避難住民の確認及び安否確認を行います。
- (2) また、避難の際に得た、要救助者、建物、道路等の破損などの状況を自主防災本部に伝え、その情報を地図上に集約します。
- (3) 情報班は、「いつ」「何が」「どこで」「どうして」「どのように」になっているかをまとめます。

2 留意事項

- (1) 「異常なし」も重要な情報です。
- (2) 市には、定期的に報告します。

● 情報伝達訓練

1 実施要領

- (1) 自主防災組織本部に口頭とメモで模擬情報を示します。
- (2) 情報班長は分かりやすい伝達文にして、各地区の情報を伝達をする班員に渡します。
- (3) 班員は、分担して巡回し、電池式メガホン等を使って伝達します。
- (4) 最終的に模擬情報がどの程度正確に伝達されたかを確認します。

2 留意事項

- (1) 伝達は簡単な言葉で行い、難しい言葉は避けます。
- (2) 口頭のみではなく、メモ程度の文章も準備します。
- (3) 各世帯への伝達を効率的に行うため、伝達経路を予め決めておきます。
- (4) 視聴覚等に障害のある方、外国人への伝達には十分配慮します。

3 使用資機材

模造紙、ホワイトボード、地域の地図、メモ用紙、筆記具、テント、テーブルパイプ椅子、トランシーバー、電池式メガホン、腕章など

■ 救出・搬送・応急救護訓練

大規模な地震災害では、転倒した家具や倒壊した家具の下敷きとなり大ケガをしたり亡くなる場合が多くなります。消防署員指導のもと地域住民によるジャッキやバールなどを使った救出・救助を習得するとともに、救助者を安全な場所に搬送することができるよう、応急担架の作り方を訓練します。

応急救護訓練は、専門的な知識や技術を必要としますので、消防署員などから指導を受けるようにします。自主防災組織の救護班は、住民参加の訓練とは別に、日本赤十字社や消防機関の行う救急救命や応急手当講習などを受講して、より専門的な訓練を受けておくことが必要です。

● 救出訓練(梁等に挟まれている場合)

1 実施要領

- (1) 廃材を利用して、家が倒壊し、梁等に人が挟まれた状況を作ります。
- (2) 挟まれている人に声をかけ、安心感を与えます。
- (3) てこの原理を利用して隙間を作り、痛みを和らげるようにします。
なお、隙間がある場合は、てこの代わりに自動車用のジャッキを使って持ち上げます。
- (4) 持ち上げた空間が崩れないよう角材で補強します。
- (5) 挟まれている身体の部位を確認し、急激に血流が回復しないように挟まれている部位より心臓側を止血帯で縛ります。
- (6) 挟まれていた人を救出します。



2 留意事項

- (1) てこに使う支点は、角材等の固くて安定性のあるものを使用します。
- (2) てこに使う角材は、太さが10cm以上の亀裂が入っていない材料を使用します。
- (3) 鉄パイプは、長すぎるものは曲がりやすいので2～3m程度の長さの物を使います。
- (4) 持ち上げる高さは、救出に必要な高さとし、崩れ防止の措置をします。

3 使用資機材

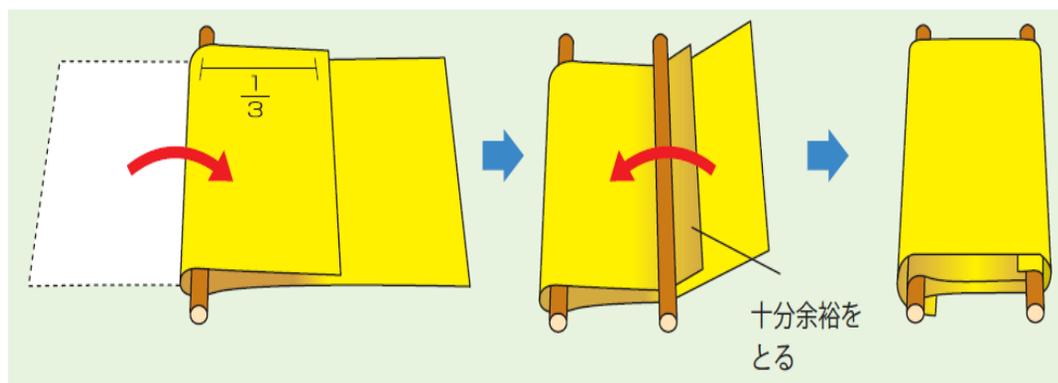
かなづち、斧、のこぎり、スコップ、角材(太さ10cm以上)、鉄パイプ(太さ5cm以上で長さ2～3m程度)、自動車用ジャッキなど

● 搬送訓練

【毛布を使った応急担架での搬送訓練】

1 実施要領

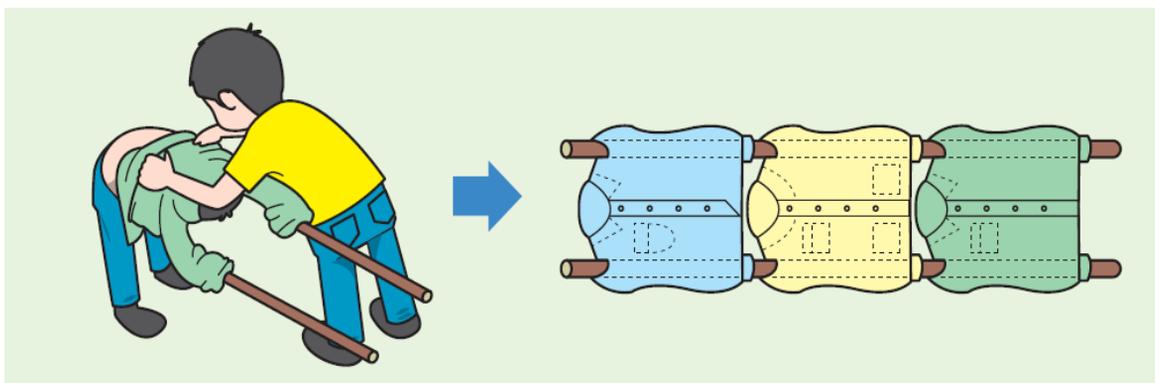
- (1) 3人(又は5人)で1組を編成します。
- (2) 毛布を地面に広げて置きます。
- (3) 毛布の3分の1よりも中心側に棒を置き、その棒を包むように毛布を折り返します。
- (4) 折り返される毛布の端にもう1本の棒を置き、その棒を折り込むように残りの毛布を折り返します。
- (5) 2人(又は4人)がかりで負傷者を応急担架に足側を先にして、震動を与えないように静かに乗せます。
- (6) 2人(又は4人)で担架を持ち上げ、1人が担架の横について負傷者の状態に注意しつつ、救護所などに搬送します。



【上着を使った応急担架での搬送訓練】

1 実施要領

- (1) 3人(又は5人)で1組を編成します。
- (2) 1人が二本の棒の両端を手で持ち上げ、頭を下げます。
- (3) 棒を持たない人は、棒を持つ人の上着を下図のように2本の棒に通します。図では棒の片方を誰も持っていないが、手の空いている人が持っておくと容易にできます。
- (4) 棒を持つ人を交代して、同様に上着を棒に通し、これを2回(又は3～4回)繰り返します。
- (5) 2人(又は4人)がかりで負傷者を応急担架に足側を先にして、震動を与えないように静かに乗せます。
- (6) 2人(又は4人)で応急担架を持ち上げ、1人が応急担架の横について負傷者の状態に注意しつつ、救護所などに搬送します。



※ 畳や雨戸を利用する方法もあります。

2 留意事項

- (1) 負傷者の意識がない場合は、気道が確保できる横向きの姿勢で応急担架に乗せます。
- (2) 発進するときは、応急担架の前の人は左足、後ろの人は右足から踏み出します。
- (3) 応急担架を持ち上げる時は、腰を痛めないよう腰を落として持ち上げます。

3 使用資機材

物干し竿又は丈夫な棒(2m程度)、毛布、古着の厚手トレーナーなど

● 応急救護訓練

◆ 骨折している場合

1 実施要領

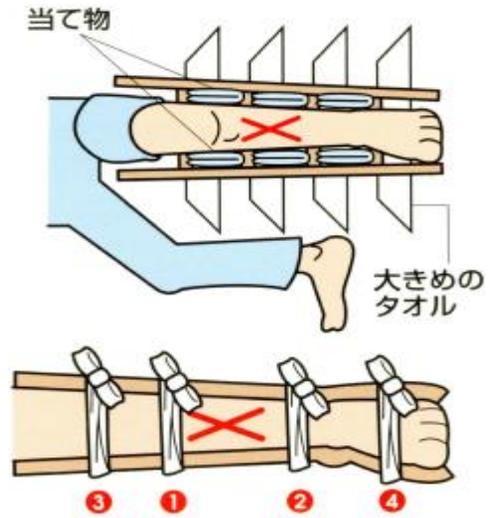
骨折している箇所副木を当て骨折部分を三角巾などで固定します。

2 留意事項

副木がない場合は、代用品(傘、雑誌、段ボールなど)を使用します。

3 使用資機材

副木(代用品)、三角巾、タオル



◆ 出血している場合

1 実施要領

【直接圧迫法】

- (1) きれいなガーゼやハンカチなどを傷口に当てて手で強く押さえます。
- (2) 出血が止まらない場合は、更にガーゼなどを重ねて幅広い包帯やタオルで縛ります。
- (3) 大きな血管からの出血で、片手で圧迫しても血が止まらない場合は、両手で体重を乗せながら圧迫止血します。



【間接圧迫法】

傷口の直接圧迫法だけでは不十分な場合に行います。

足や胸などから出血の場合は、親指や手のひらで傷口から最も心臓に近い動脈を強く押さえて血の流れを止めます。

2 留意事項

感染防止のためゴム手袋やビニールの買い物袋などを使用し、血液に触れないように注意します。

3 使用資機材

ガーゼ、三角巾、タオル、ゴム手袋、ビニールの買い物袋

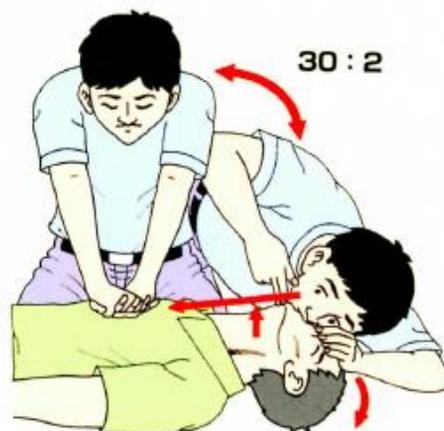
◆ 人が倒れている場合

【心肺蘇生法】

1 実施要領

人口呼吸と胸骨圧迫(心臓マッサージ)を組み合わせて行います。

- (1) 親指と人差し指で、鼻をつまみ鼻の孔をふさぎます。
- (2) 大きく口を開けて、静かに1回1秒かけて息を吹き込みます。
- (3) いったん口を離し、もう1回息を吹き込みます。
- (4) 胸の真ん中に手を重ね、垂直に体重をかけ、胸骨が4～5cm下方に圧迫させるように1分間100回の速さで圧迫します。
- (5) 30回圧迫後、人工呼吸を2回行い、この動作を一定間隔で繰り返します。



2 留意事項

- (1) 口対口の人口呼吸がためらわれたり、感染防止措置(人口呼吸用マウスピース等)ができない時は、胸骨圧迫を行うだけでもかまいません。
- (2) 胸骨圧迫の際には、肘は曲げないで行います。

【AED(自動体外式除細動器)を用いた救命】

1 実施要領

音声メッセージに従って行います。

- (1) 電源を入れる
- (2) 電極パッドを胸に貼る
- (3) 電気ショックの必要性をAEDが判断
- (4) ショックボタンを押す。
- (5) 胸骨圧迫を継続する。



2 留意事項

- (1) 体が汗や水で濡れていたら、タオルで拭きます。
- (2) 心電図解析中は、誰も急病人に触れないようにし、ショックボタンを押す場合も同様です。

■ 避難訓練

1 実施要領

- (1) 自主防災本部の指示を受け、各地区で避難指示と地区で決められた避難場所を伝えて廻ります。
- (2) 住民は、自宅の火災発生防止措置を行うとともに、安全で動きやすい服装で避難場所に集合します。
- (3) 避難場所で人員点呼して安否確認を行います。
- (4) 傷病者や病人がいる場合は、情報班にその旨を伝えて、市指定避難所までの誘導方法を検討します。
- (5) 自主防災本部に連絡を入れて、市指定避難所の受け入れ準備完了の確認ができたなら、避難を開始します。避難に当たっては、予め決められた役員が訓練参加者の前後に立ち、避難所まで誘導します。
- (6) 避難途中では、倒壊の危険のある家屋やブロック塀などを避け、高齢者などの要配慮者を列の中心において、逃げ遅れる人がでないように留意します。
- (7) 避難所に到着したら、点呼をとって全員の無事を確認して、自主防災本部に避難の完了を報告します。

2 留意事項

- (1) 事前に地域の避難場所や経路、危険箇所を調べて把握しておきましょう。
- (2) 早めの避難を促しましょう。
- (3) 一人で避難することが困難な人を手助けする方法を習得しておきましょう。
- (4) 避難の際に、できれば「ガスの元栓をしめる」「ブレーカーを落とす」といった火災発生防止措置を行うよう各世帯に呼び掛けましょう。
- (5) 原則、徒歩で避難しましょう。

3 使用資機材

メガホン、誘導旗、ロープ、車椅子、人数集計票、筆記具など



■ 給食・給水・配給訓練

大規模な災害が発生すると、ライフラインがストップし、流通機能が混乱するため食料や飲料水などの入手が困難になります。物資が供給されるまでの間は自力で対処しなければなりませんので、協力して給食・給水活動が行えるよう訓練します。

● 給食訓練

1 実施要領

- (1)大鍋や釜など使用した炊き出しを行います。
- (2)アルファ化米の炊き出しも行い、実際に食べてみます。

2 留意事項

- (1)被災後の衛生環境の悪い中で大勢の人に配給することを考え、手や調理器具の洗浄をしっかり行います。
- (2)家庭での調理とは勝手が違うので、燃料の確保、水加減、火加減などを習得しておきます。
- (3)皿にラップを敷くなどして努めて洗い物を少なくするようにします。

3 使用資機材

釜、大鍋、ガスコンロ、食材、調味料、調理器具、割り箸、三角巾など



● 給水訓練

1 実施要領

給水車から給水します。

2 留意事項

事前に給水車による給水拠点を決めておきます。

3 使用資機材

ポリタンク、非常用給水袋



※ 地域内の井戸などの飲料水を確保できる場所も確認しておきましょう。

■ 避難所運営訓練

災害時の避難所の運営は、自主防災組織の重要な役割のひとつです。

避難所生活が長期にわたる場合には、適切なルールに基づいて、できるだけストレスが少なくなるよう事前に訓練を通して、運営方法について検討しておく必要があります。

1 実施要領

(1) 避難所の安全点検

避難所の安全確認のために、被害箇所や余震などで危険が及ぶ可能性がある箇所がないか点検します。

(2) 避難スペースの確保

安全が確認できたら、避難者の居住スペースを確保するとともに、避難者の管理や運営に必要な場所や活用スペースも決めていきます。また、避難者の共用利用スペースとして避難者の占有を避ける場所についても決めます。

(3) 避難所に避難

安全が確認できたら避難している住民を避難所の決めた場所に避難させます。

(4) 段ボールなどで間仕切りし、毛布などを配布し、避難生活ができる環境を整えます。

(5) 避難者名簿の作成

避難者名簿を作成します。

(6) 避難生活ルールの作成

多くの住民が、厳しい避難所環境の中でも少しでも快適に生活できるように避難生活ルールを作成します。



2 留意事項

(1) 避難所の開設は基本的に市が行いますが、大規模で突発的な災害の場合や休日または平日の夜間や早朝に発生した災害の場合、避難所に最初に到着するのは地域住民であることが想定されることから、住民自ら避難所を開設することもあります。

(2) 避難生活ルールの作成に当たっては、生活の時間(消灯、食事、清掃等)、生活の基本(貴重品の管理、土足厳禁等)、場所を決めて行うこと(喫煙、飲酒、携帯電話の使用、見舞客の対応、ペットの管理等)、水や物資の管理、トイレの管理、ゴミ処理等について明確にしておきます。

3 使用資機材

間仕切り用段ボール、ブルーシート、毛布、PPロープ、ホワイトボードなど

災害図上訓練(地域防災マップの作成)

この訓練は、地図を作成して災害時の対応策を考える図上訓練です。参加者が地図を囲みながら議論して、地図に書き込みをすることで地域の防災マップが出来上がります。日頃気付かなかった地域の防災対策が明らかになり、参加者の防災意識が向上するようになります。

グループ分け

1グループを10名程度で編成し、グループメンバーが決まったら、リーダーや記録係を決めます。

雰囲気づくり

参加者は、自己紹介などを行って討論しやすい雰囲気づくりをします。防災活動歴や被災体験を交えるのも良いやり方です。

被害想定の説明と役割分担

想定する災害と被害想定を説明し、認識の統一を図ります。被害想定は詳細である必要はありませんが、現実的なものになるようにします。想定する災害によっては住民、市職員など役割を決めます。

地図への書き込み



1 実施要領

(1) 想定する災害に応じて様々な防災関連の状況を地図に色分けして書き込みます。

- ・道路や河川、市役所や病院などの施設
- ・崖崩れや液状化などの危険な場所
- ・住宅密集地、要援護者が多い地域
- ・被害想定など

(2) 参加者は、書き込みしながら災害状況を整理し、想像力を膨らませて災害時の対策や防災対策などを考えます。

2 留意事項

書き込みは全員で行います。

3 使用資機材

街区地図、地図に被せる透明シート、マジックペン、丸型カラーシール、付箋、各種ハザードマップなど

グループ討議

出来上がった地図を見ながらテーマに応じた意見交換を行います。最初の段階では具体的な課題を提示して、解決策を考えるのも一つのやり方です。

成果発表・講評

グループ毎に話し合った内容について発表します。これは必ず行うようにします。様々な考え方が披露されることで、防災についての考え方が深まります。また、市の防災担当職員がいる場合は講評を受けます。

7 防災資機材の活用と留意事項

酒田市は、各コミュニティセンター等に防災資機材を整備しています。この防災資機材は、操作の習熟、動作確認の意味合いからも、学区、コミュニティ振興会、単位自主防災会(自治会)の訓練で使用することができます。

ただし、使用するにあたっては、下記の事項に留意して下さい。

- ◆ 衛星携帯電話(アイサットフォン)
毎月10分間は無料通話できますので、通信訓練を定期的に行って下さい。
- ◆ 消火器
使用した場合、消火剤の充填や交換は市で行いますが、使用にあたっては周辺への影響に十分留意して下さい。
なお、消防では水消火器の貸出を行っていますので、利用して下さい。
- ◆ ガス式発電機用LPガスボンベ、コンロ用LPガスボンベ
使用した場合、LPガスの充填や交換は市で行います。
- ◆ 発電機・投光機(ガス式発電機を含む)
定期的に動作するか確認して下さい。
- ◆ 難燃性アクリル真空パック毛布
衛生上、訓練等では開封しないで下さい。
- ◆ 簡易トイレ
衛生上、訓練等では開封しないで下さい。
- ◆ 給水袋
衛生上、訓練等で使用しないで下さい。
- ◆ 学校等にある備蓄品
訓練では使用できません。
ただし、交換時期(消費期限の1年ほど前)が来ましたら、訓練等で使用していただけるよう市からお知らせします。
- ◆ アルファ化米
県から毎年アルファ化米を受領する予定になっていますので、希望に応じて自主防災会等に配布しますので、給食訓練で活用して下さい。